

第3回第7次福島県総合教育計画策定に関する懇談会 議事録

日 時 令和2年10月21日（水）
午後1時30分～午後3時30分

場 所 杉妻会館 3階 百合

福島県教育庁教育総務課

1 出席者

(1) 第7次福島県総合教育計画策定に関する懇談会委員 計12名

青砥和希委員、内田広之委員、小野広司委員、黒川佳子委員、小檜山宗浩委員、齋藤雄一郎委員、佐藤房枝委員、高瀬芳子委員、丹野香須美委員、伴場賢一委員、森涼委員、渡部早苗委員

(2) 福島県 計21名

教育委員会教育長、政策監、教育次長、県立高校改革監、庁参事、生涯学習課社会教育主事、教育総務課長、財務課長、施設財産室長、職員課長、福利課長文化財課長、義務教育課長、高校教育課主幹、県立高校改革室長、特別支援教育課主幹、健康教育課主幹
教育総務課企画主幹兼副課長、他3名

2 内容

(1) 協議

- ① 目指すべき教育の姿について
- ② その他

3 発言者・発言内容

次のとおり

事務局 (田母神企画主幹)	<p>－開 会－</p> <p>開会に先立ちまして、御連絡いたします。</p> <p>本日は、新型コロナウイルス感染防止のため、マスク着用にご協力いただきましてありがとうございます。</p> <p>換気に関しては扉を開けた状態で、様子を見ながら窓の方で調節してまいりたいと考えております。会場の人数制限については、傍聴、マスコミ各社にも御協力いただいております。ありがとうございます。</p> <p>次に、定足数の確認です。本日は14名中現在11名御出席いただいております。本懇談会は有効に成立しておりますことを御報告いたします。なお、青砥委員はお仕事の関係で遅れていらっしゃいますが、間もなくこちらに到着される予定になっております。12名の御出席になります。</p> <p>それでは、ただ今から「第3回第7次福島県総合教育計画策定に関する懇談会」を開会いたします。</p> <p>本日、進行を担当します教育総務課の田母神と申します。よろしく願いいたします。</p>
事務局 教育総務課長	<p>－委員紹介－</p> <p>はじめに、成澤委員の御退任に伴いまして、新たに委嘱されました委員の方について、教育総務課長より御紹介いたします。</p> <p>教育総務課長の高瀬でございます。成澤委員の御退任に伴い、今回より新たに御就任いただきました委員を御紹介させていただきます。</p> <p>佐藤房枝委員でございます。よろしく願いいたします。</p> <p>よろしく願います。</p>
事務局 内田座長	<p>－協 議－</p> <p>では、協議に移ります。</p> <p>本懇談会の議長は、設置要綱第5条により、座長となっております。本日も内田座長、よろしく願いいたします。</p> <p>座長の内田でございます。</p>
教育総務課長	<p>6月に第1回、8月に第2回策定懇談会を開催いたしました。現状と課題、目指すべき教育の姿について皆様から色々な御意見をいただいております。</p> <p>本日は、前回までの議論を基に、新たな教育計画の柱となるべき「目指すべき教育の姿」のまとめに向けて、様々な視点から御意見をいただきまして、議論を深められればと思います。</p> <p>実り多い懇談会となるよう、委員の皆様には、積極的に御協議いただきますよう、よろしく願いいたします。</p> <p>それでは協議の(1) 目指すべき教育の姿について、事務局から資料について説明をお願いします。</p> <p>資料2を御覧いただければと思います。</p> <p>これまでの御意見を踏まえまして、今後目指すべき教育の姿について、事務局にて一旦整理させていただきました。</p> <p>まず、考慮すべき社会の現状・変化についてです。第1回、第2回で提出させていただいた資料を基に、皆様からの御意見を踏まえ、エッセンスを抜き出しました。</p>

左側に全国的な状況、右側に福島県の状況を記載させていただいています。

全国的な現状としましては、人口減少・少子高齢化・過疎化の進行、人生100年時代による学習ニーズの多様化、成人年齢の18歳への引き下げ、AIの進化等の技術革新、グローバル化の進行、SDGsの達成に向けた取組の広がり、新型コロナウイルス感染症等の新型感染症の影響を踏まえた社会の変化が挙げられると考えられます。

30年後に予想される姿といたしまして、前回各種報告書で指摘されている内容についてまとめた資料を提示させていただきましたが、そうした内容を踏まえまして、更なる人口減少・少子高齢化、Society5.0の到来による職業や生活の変化、地球温暖化等の世界規模で解決すべき課題の深刻化の可能性、世界経済における日本のプレゼンスの低下等を挙げさせていただきました。

右側の福島県の特徴・現状につきましては、全国3位の県土の広さ、はま・なか・あいづに代表される地域ごとの多様性、豊かな文化、東日本大震災からの復興・創生を挙げさせていただきました。

30年後に予想される姿といたしまして、廃炉や帰還困難区域の解除、再生可能エネルギーの導入推進等復興・創生に向けた取組の継続、更なる人口減少、少子高齢化による就業者数の減少や過疎化等による地域コミュニティの衰退のおそれを挙げさせていただきました。

その下、福島県の教育の主な現状・課題についてでございます。こちらは、前回提示させていただいたSWOT分析の資料から主なものを抜き出させていただきます。

「強み」といたしましては、児童生徒の問題行動が全国的に見て少ないこと、震災からの復興・創生の過程で創造的な取組が生まれたことや、感謝や貢献の気持ちが芽生えたことを挙げさせていただきました。

「課題」といたしましては、算数・数学・英語が苦手である、無回答率が多い、学力の低い層が多いなどの学力の課題、震災の影響等による心のケアが必要な子どもが多くいることを挙げさせていただきました。

「機会」といたしましては、イノベーション・コースト構想等に向けた企業や研究機関の取組、新型コロナウイルス対策で見えてきた社会全体でのオンライン化の動き、文化財の活用等の法整備が挙げられるかと考えております。

「恐れ」といたしましては、経済的な格差や人間関係の希薄化等の家庭や地域を取り巻く困難な状況、避難地域の人口減少、風評・風化を挙げております。

裏面をおめくりいただければと思います。

今後目指すべき教育の姿として、まず育成したい人材についてです。全ての子どもたちを急激な社会の変化に柔軟に対応していくことができる人間、福島復興・創生等社会や地域を担う力と自分の人生を切り拓く力を兼ね備えた人として育成していく必要があることを1点目として挙げています。また、それぞれの人が多様な自分の個性を生かした、リーダーやプロフェッショナル等多様な人材となっていく必要があることを2点目として記載させていただきました。

続きまして、必要と考えられる資質・能力についてです。

1点目として、変化の激しい社会の中で、新しいことを学び続けながら、他者と協働して、新たな価値を創造していくために必要な力として、コミュニケーション能力等を挙げております。2点目として、社会の課題に対して主体性や当事者意識を持ち、粘り強く向き合う力、レジリエンス等を挙げております。3点目といたし

まして、自己の強み等を認識して自己肯定ができ、他者に寛容でいられる豊かな心を挙げております。

その下は、こうした育成したい人材や必要と考えられる資質・能力等を踏まえた上で、10年間で目指す姿・「ふくしまならではの」教育について記載をさせていただいております。復興・創生、人口減少等の課題の多い課題先進県だからこそ、そうした「福島らしさ」を生かした、グローバルとローカル、デジタルとアナログ、学校と地域、様々なものを総ぐるみとした教育、ということを一ポイントに記載させていただきました。二ポイントとして、移住定住促進の流れを踏まえまして、福島に人が集まる魅力的な教育の実現と教育水準の確保を記載させていただきました。三ポイントとして、人生100年時代を見通したライフステージに応じた教育・学習の場の確保を記載させていただきました。

こうした目指すべき教育の姿を踏まえまして、現在御意見いただいている教育施策として、その下に挙げさせていただいております。

一ポイントとして、小中高大を見通していく必要があるとの御意見をいただきましたので、学校段階を見通した学力向上、健康・体力づくりを挙げております。二ポイントとして、学校と地域の連携・協働、地域や復興の課題を生かし人や社会と接する場の設定、失敗を克服する経験ができる場の充実を挙げております。三ポイントとして、教員に関する様々な御意見をいただきましたので、教員の役割と外部人材の役割等を踏まえた教員の役割の明確化、多様なニーズに応えられる多様性のある教職員体制、教員の資質向上や教員志願者の確保等の教員の養成・採用・研修に関する事、働き方改革に関する事を挙げております。四ポイントとして、オンラインと対面の良さを双方を取り入れたICT活用による学びの変革を挙げております。五ポイントとして、特別支援教育や不登校生、外国人、帰国子女等への個別支援を挙げております。六ポイントとして、震災の教訓の継承、被災地域の教育復興を挙げております。七ポイントとして、学校や家庭等様々な立場で成長を後押ししていくことや、博物館の重要性等御意見をいただいた点を踏まえ社会教育等の充実について挙げさせていただきました。

こうした具体的な施策につきましては、今後柱立てを含めて御検討いただきたいと考えておりますが、本日は今までいただいた御意見の主なものとして提供させていただきました。

資料3につきましては、皆様の主な御意見と見えてきたものについて、前回の会議での御意見を加筆させていただきましたので、御議論する上で御参照いただければと思います。説明は以上でございます。

高瀬課長ありがとうございました。

ただ今、事務局から資料2、資料3について説明がありました。これまでの第1回、第2回の懇談会における皆様からの御意見を踏まえ、事務局で整理していただいたものでして、本日はこれらを基に議論を深めていければと思います。

その上で、今後ですが、上位計画の動向を踏まえる必要があると伺っております。県全体の計画の動向も踏まえ再整理の必要も出てくる場面もあろうかと思いますが、今回ひとまず今後目指すべき教育の姿ということで、今お示しいただいたポンチ絵をベースに御意見を伺いたいと思います。次回以降に、説明いただいた資料2の裏側の一番下にあります教育施策について検討したいと思います。本日は、理念や課題、目指すべき姿について御意見をいただきたいと思います。

本日お示しいただいた資料が骨格となっていくまして、これにいろいろな文章が

内田座長

	<p>入っていき、最終的に計画の形になっていくと思っております。そうしたことを踏まえ、ここで挙げられているキーワードを参考に、もう少し、こうした視点があるのではないかという別の観点や、それぞれのキーワードについて、特に、皆さんの普段御活躍いただいている分野と結びつけてこういうところが大事ですとか、自由にアイデアを出していただく段階と思っております。今日はそうした議論を進めていきたいと思っております。</p> <p>全体の進め方としましては、資料2の表で15分位意見を出していただき、裏側の今後目指すべき教育の姿に箱が3つありますが、育成したい人材、必要と考えられる資質・能力で30分位、次に10年間で目指す姿・「ふくしまならではの」教育で30分位、最後に今後考えていく教育施策について、これは次回を中心にと申しましたが、時間が取れば10分位御意見をいただければと思います。このような時間配分で進めていきたいと思っております。</p> <p>それでは、資料2について議論していきたいと思っております。まず、表側「考慮すべき社会の現状・変化」や「教育の主な現状・課題」につきまして、自由に御意見をいただければと思います。よろしくお願ひいたします。</p> <p>では、森委員お願いします。</p> <p>森でございます。よろしくお願ひいたします。</p> <p>分からないことがありまして、現状の公立中学校・高校のICT環境、パソコンの生徒1人当たりの現状を教えてください。Wi-Fi環境についても整備状況を教えてください。</p>
<p>内田座長 教育総務課長</p>	<p>ただ今の森委員からの御質問について、事務局でお答え願えますか。</p> <p>申し訳ございません。本日詳細な資料を手元に用意していなかったのですが、ICTの環境整備につきましては全国的にも遅れている状況がございます、一部の小さい町村ではかなり整備が進んでいますが、多くはそこまで進んでいない状況です。高校につきましては、パソコン教室がある位で、ふたば未来学園など一部の学校では整備が進んでおりますが、限られた状況でございます。一方で、GIGAスクール構想により急激にICT環境整備が進んでいる状況でございます、本年度中には義務教育段階については1人1台端末がおおむね整備される状況です。</p>
<p>森委員</p>	<p>ありがとうございます。GIGAスクール構想については存じ上げておりますが、これは公私立分け隔てなく1人1台の端末があるということですが、その時にタブレット又はパソコンを配布すれば授業がICT化していくかということには大きな差と言いますか、教員の取り扱い方、指導の仕方がどこまで追いついていくのか、おそらく日本中の学校での1つの課題なのではないかと思っております。そういったことに対し、県教委としてどういった取組をしていくのかということと、高校については国の方も1人1台端末整備は考えていないようですが、であるならば県が独自に1人1台端末を与えるような、財政的なものがここには関わってきますが、思い切ったことをやってもいいのではないかと、全国に先駆けてということも一つではないかと思っております。教員の準備と高校の端末整備についてお願いします。</p>
<p>教育総務課長</p>	<p>教員の指導に関しましては、研修等を進めていく必要があると考えております。先日も、校長先生を対象とした研修会を開催したところです。また、9月の補正予算で、研修費用を、義務教育、高校教育、特別支援教育のそれぞれの学校種で、先進校の視察や様々な研修の予算を確保しているところです。そういった事をしながら、事例の蓄積や指導力の向上に取り組んでまいりたいと思っております。</p> <p>高校の1人1台の端末につきましては、現在国のGIGAスクールの対象になっ</p>

<p>内田座長</p>	<p>ておりませんので、BYODの方式を含めて県立高校では考えておりました、その際家庭の費用負担が課題となると考えておりますので、県として何らかの手当ができるかを含めて検討してまいりたいと思います。</p> <p>ただ今御説明ありましたが、森委員いかがですか。</p> <p>おそらく震災以降、体験学習・プログラム学習等が福島県で進められてきましたが、逆にICTのところがかえって弱くなってしまった課題があるようなので、重要な視点だと思いますし、機器だけではなく教員の指導の部分という意味で重要な御指摘だったと思います。ありがとうございます。他の委員から何かございますか。</p> <p>御質問でも結構です。今のICTにからめてでも結構ですが、黒川委員いかがでしょうか。</p>
<p>黒川委員</p>	<p>あさか開成高校の黒川です。</p> <p>本校は1学年5クラス、600人の生徒がおりますが、パソコン室はパソコンが40台ある1つだけです。Wi-Fiは、この間のコロナ対策で配分されたお金で、1つだけルーターを購入しました。学校の現状がこうなので、私学にお子さんがある教職員から、私学ではみんなタブレットを持って、どういう費用で負担しているかわかりませんが、休んだ授業はオンラインで視聴できるのに、本校のこの現状は、と言われます。施設の面もそうですが、教員はやっていきたい、積極的に導入したいと思う者もいますが、現状それを試す環境にないのかと思います。ただ、コロナで休校になったときは、生徒に簡単に連絡して、できる人からGoogleのクラスルームですとか、取り立てて講習会をしない中で教員も、生徒たちもホームルームみたいなものができるということを認識しました。以上です。</p>
<p>内田座長 森委員</p>	<p>ありがとうございます。他の委員の方からございますか。森委員どうぞ。</p> <p>実は余談になりますが、4年前にシリコンバレーに行ってきました。シリコンバレーにスタンフォード大学があり、その近隣の公立学校を視察してきました。その時に、公立高校の校長先生が、本校の目指すべき教育について「グローバルシィズンを作り上げること」「今ない職業につけるような力を身に付けさせること」の2点を話されて、私は目から鱗が落ちました。アメリカは進んでいるなど。当時オバマ大統領が推奨したSTEM教育をどの学校でもやっています。今はSTEMにArtsを加えてSTEAMという言い方になりますが、STEAM教育を文系理系隔てなく、どんな子どもたちにも与えられるような教育の場があると、将来我々の想像もつかない仕事ができたと対応できるのかなど。その公立高校では、生徒たちが物作りをしておりまして、ロボットやアプリなど様々な物を作り、これがこれからの時代に対応した教育だろうと思って帰ってきました。</p> <p>本校もなるべくICT化を進めたいので、一部の中高一貫や特進クラスにはタブレットを受益者負担で購入しています。ただこのコロナがありましたので、来年からは学年進行で全員に購入させます。タブレットでいたい6万円位です。それを使ってICT化を進めていこうと。校舎内全てにWi-Fiが通っておりまして、どの教室からでも授業ができますし、今年は1学年の全ての教室にプロジェクターを設置しました。コロナ休校の時は、本校では休まずSHRから7校時までオンライン授業をやり続けました。ですので夏休みは短縮せずにそのままにしました。これからは、間違いなく対面授業とオンライン授業のハイブリッドを模索していく必要があると感じています。そのためには、環境を整えなければならない。端末然り、Wi-Fi然り、国ばかりを頼っていてもなかなか先に進まないと思いますので、県独自の思い切った施策をお願いしたいと思います。以上です。</p>

内田座長

ありがとうございました。STEAM 教育やハイブリッドなど色々なキーワードが出てまいりました。教育のニーズが、日々刻々と変化しており、それがコロナで加速化したと思っております。私の所属する福島大学も、あまりICTの観点で教員の指導力を伸ばすような教員養成や研修をやっていくという発想があまりなかったこともあり、福島大学も県内の教育界をリードしていくという意味で発想を変えて、現在、進めようとしております。実際、難しい現状もあるのですが、森委員のお話にあったSTEAMや文理融合など、文系や理系の縦割りではない教育が求められてくると思いますので、福島大学も高等教育の分野から、教育学の専門家もおりますので、県教委とも連携してまいりたいと考えております。いくつか課題、キーワードが出てまいりましたが、他の方からございますでしょうか。青砥委員お願いします。

青砥委員

ICTに関連して意見を述べさせていただきたいと思っております。未来の準備室の青砥です。

ICTが重要であることは皆さん全員が認識されていると思っておりますが、私としましては誰一人取り残さないという、現在の学習指導要領のコンセプトのためにやるべきで、ICTのより一層の環境整備を進めるべきと感じております。これを感じる理由の1点目として、昨年度富岡町の第一、第二中学校三春校で講演させていただく機会がありまして、中学生に授業をさせていただきました。三春町の曙ブレーキの工場跡地でサテライトで学んでいて、昨年度の状況ですと、富岡町で既に再開している中学生と、三春町で中通りに住みながら富岡町のことを学んでいる中学生が、オンラインシステムで富岡にいる子は富岡のことを伝え、三春の子は三春で学んでいることを伝える学び合いを実現していました。震災の避難によりそのような対応を取らざるを得ないので、学校の先生方や教育委員会がやられたと思うのですが、これから統廃合で中山間地域の学校の数が少なくなっていく待ったなしの状況で、都市部の学校に近いところに住む学生が有利になる、偏りがあるのはいけないのかと思います。震災の避難への対応から得られた技術や蓄積を、これから統廃合が進む状況に学びをアーカイブしていく、生かしていくべきと感じました。このような遠隔において、組織は同じだけれども立地が異なる中学生同士が学び合いをしているというのは、数少ない事例だと思いますので、福島の財産として参考にすれば良いのではないのかと思います。

もう1つの理由は、ちょうど今大学入試の出願の時期でして、私は白河市で居場所づくり事業をしており、生徒の出願の様子などを隣で見せております。大学の志望理由書や事前課題等パソコンを使うことが前提で、パソコンを使うことができない生徒が大学入試で高い評価を受けることが難しい状況にもう既に変わっていると思っております。パソコンが学校の中で使える使えないで進路が制限されてしまう状況、先行して学校に環境が整備されていると評価されやすく、そうではない学校は評価されないという状況になってしまっているのでは、時間待ったなしだと思います。端末1人1台は当然ですが、先生方の資質向上も待ったなしだと感じます。家庭でパソコンを使える子はどんどん大学に入れるが、そうではない子はどんどん大学には入れないような状況になっていると思っておりますので、誰一人取り残さないためにこそ端末、ICTの環境整備、資質向上は必要であると考えます。次第です。

内田座長

ありがとうございました。先程の黒川委員の事例紹介に加え、青砥委員の分かりやすい事例の紹介だったと思います。確かに福島県のICT全体で見れば、全国的には厳しい数値かもしれませんが、震災復興の過程やそれぞれの高校の取組など先

	<p>進的な事例が生まれていると思います。そういった事例を県内で共有するという視点も必要なのかと思います。先日、高瀬課長もリビング福島に投稿されている中で、県内の先生方で事例が共有できていないという課題があると書かれていましたが、正にそのとおりで、面白そうな取組があると他県の事例を探したり視察に行ってしまうがちですが、今お話にあった富岡町の例など、そのとおりで、少人数のところでは震災復興の過程で遠隔技術を駆使して面白いことを行っている事例です。身近な進んだ事例も併せて進めていくことが必要かと思いました。</p> <p>色々な事例の紹介や御意見等出ましたが、資料2の1ページ目について他にいかがでしょうか。小檜山委員お願いいたします。</p> <p>全国的な状況の現状のところ、東日本大震災と言いますか自然災害を入れる必要があるのではないかと。30年後には地球温暖化や世界規模で解決すべき課題とあるが、本県ばかりでなく熊本地震や今年の台風19号、熊本の大雨などもありますので、大規模な自然災害が多発している、発生しているとすると、ずっと隣の福島県の現状と、裏面にも流れるかと思しますので、自然災害が入っていなかったのに加えると良いと思います。</p> <p>確かに重要な視点だと思います。資料2について区切って御意見を伺っているところですが、きっちりと課題や目指すべき姿を分けにくいところもあると思いますので、論点が前後しても構わないと思います。時間の関係もありますのでひとまず資料2の裏面にいきまして、今後目指すべき教育の姿について、一番上の四角の育成したい人材や、必要と考えられる資質・能力の観点で、事務局に整理していただいておりますが、この当たりの視点でまた皆様から御意見をいただきたいと思えます。こういう視点も必要ではないかとか、こんな人の育成が必要ではないかという視点で御意見をいただければと思います。当然、他のところの課題や現状、施策にかぶってくる部分もあるかと思しますので、あまりここの論点だけに縛られるような必要はないのですが、是非、皆様からまた御意見やアイデアを出していただければと思います。小野委員お願いします。</p> <p>皆さん考えている間に諸々お話ししますが、先程のお話もありますが最終的には予算なんだと思います。ICTに関しても、民間でも電子機器を入れますが、更新料など相当のコストがかかるのが実態なので、教育でもそうになっていくと思えます。実際の教育現場として私たちは町村と向き合う中で、首長さんが教育に熱心だとおっしゃる割にあまり予算を割いていないところがあって、手前味噌で申し訳ありませんが、新聞の予算は交付金などでいろいろ見られているはずなのに実際ほとんど取っていないです。そういった状況や、割いていると言っても別なところに回っていく自治体が多いのが実態で、これからの教育が重要だと思うのであれば首長さんはしっかり考えていかないと自治体が存続できない、としっかりアピールしていかないと、計画が書いただけになってしまうと実感としてあります。同様にICTの格差に関しては、家庭内の格差をどう補うか高校が相当効いてくると思えますが、ここは県がどこまで踏ん張れるかなんだと思います。ちょうど県総合計画の見直しが入っていて、教育庁以外に土木、生活環境、企画など様々な審議会で意見を求められるのですが、基本的にこれからの10年間ですとか、どこに予算を割くべきかという、教育なんだと思う。他はある程度整備など見えてきている中で、教育は本県は遅れている。全国平均を上回り、更に突出した何か「教育県福島」、人を集めてくる武器にしようとしているのであれば、ここに本当に予算を割いていかなければ駄目だということを、もっと強めに書いていくための努力というか、計</p>
小檜山委員	
内田座長	
小野委員	

<p>内田座長</p>	<p>画もそうなっていくべきだと思います。その点では、先程の現状分析も、世界におけるプレゼンスの低下やA Iへの対応など、今日本で危機的状況にある部分を強めに書いていかないと、予算の獲得に響いてくるのかと思いますし、その辺りを他の審議会でも教育が優先だと言おうと思っていますが、教育も全体の中で書き込みをしっかりとしていくべきであろうと思います。</p>
<p>丹野委員</p>	<p>ありがとうございます。大変心強い御意見でした。丹野委員、拍手されていたようですが何かございますか。</p>
<p>丹野委員</p>	<p>まさに拍手喝采の御意見でした。</p> <p>私は文化財保護審議会委員をしておりますが、ここ数年、福島県の文化財指定のための調査費用がものすごく削られてしまっていて、年に2～3件ほどしか指定できない状況にあります。ところが市町村からは、福島県指定文化財への推薦がたくさん上がってきています。中にはもう10年待っているものもあって、私が担当しているような無形の文化財はいざ調査しようとなった時には、なくなっているという可能性もあるわけです。さらには、文化財の修復にはお金がかかるものですから、その予算をどこから集めてくるかとなったときに、予算がないので修理できない状態になっているものもあります。そういう状況を見たときに、福島県には素晴らしい文化がありますと言えるのか、と思っているところです。首長さんたちは文化の町を作りましょうと連呼されている、でもその割にはちっとも文化財に関心を持ってもらえず、予算も回してもらえません。福島県立博物館の常設展も内容をほとんど変えられない状態にあります。それで文化の町福島を作りましょうなどは笑止千万と言わざるを得ません。</p> <p>話題は変わりますが、子どもたちのICTも気になっています。それは親に対する教育です。私たちの世代は、学校で習って分からないことや宿題を家の誰か、例えば両親や兄弟、祖父母等が教えてくれたと思いますが、プログラミングなどは家に帰っても教えてくれる人がいない。親からそんなの習っていないから分からないと言われると思うんです。実際私も隣人から聞いたのですが、学校でプログラミングを習ったがよく分からなかった、家に帰りタブレットを開いてみたが母親と2人で全然分からず終わってしまったという話を聞いて、学校の現場も大事なのですが、家庭や地域も一緒に進めていかないと、そういうことに詳しい家庭の子どもは分かるけれども、そうではない家庭の子どもは取り残されてしまうことになるのではないかと心配しています。以上です。</p>
<p>内田座長</p>	<p>ありがとうございます。とても重要な視点ですね。復興の過程で、文化財や、お祭りなど無形のもので地域がつながることも語られることも多いので、非常に重要であると実感しました。</p> <p>今議論しているのは、育成したい人材や必要とされる資質・能力が中心ですが、今話題となりました予算の話や親への教育等多岐に渡る御意見でも結構なのですが、他の委員からございますか。伴場委員お願いします。</p>
<p>伴場委員</p>	<p>Bridge for Fukushimaの伴場です。よろしく申し上げます。</p> <p>まず基礎情報の確認なのですが、まだ僕の理解が追いついていないのか、10年間で目指す姿・「ふくしまならでは」の教育について、これは意味合いとしてこれから目指す姿という理解でよろしいのでしょうか。それとも10年間かけて作っていきますという考え方なのか、今この時点で目指しますというのかで意味合いが変わってくると思うので、そこの整理をお願いします。</p>
<p>内田座長</p>	<p>今のお話だと、前者だと思っていたのですが、事務局いかがですか。</p>

教育総務課長

30年後を目指しながら10年で何をするかを決める計画になりますので、10年間を通して目指すイメージです。

伴場委員

10年後にここを目指すということですか。

教育総務課長

10年間一貫して取り組んでいく姿ということですか。

伴場委員

10年間でこれをしていくということですね。それで言いますと、まためちゃくちゃ周回遅れになるのではないかと思います、正直に言うと。先程小野委員からお話があったとおり、本県の教育のスコアはそれほど高くないと認識している中で、もうここは既に取り組んでいる高校もあると思います。それをこれからの計画の中に取り組むのではなく、その先を10年間で作るように、何をすべきか議論すべきなのではないかというのが僕の問題提起の1つ目です。

更に言うと、総合計画の審議委員をさせていただいたときにもさんざん僕自身もまだ作れていないのですが、「ふくしまならでは」を結構安易に使うのですが、「ふくしまならでは」とは本当に何なのでしょう。更に言うと「ふくしまならでは」だから作れる教育とは何なのでしょう。ここをやはり議論として作らないと、先程森委員からお話のあったアメリカの高校ではビジョンとミッションがはっきりしていて、10年後のIT化が進む時点でその仕事を作るというのは明確で誰でも分かりやすい説明で、そこを作りきるのが計画を作る上での目的だとすると、そのギアを1つ上げた方が良いのではと思います。その中で僕なりの理解を共有させていただくと、「ふくしまならでは」はいろいろあるのですが、イノベーションが比較的早く行われたのが福島だと思っています。安積疏水という日本で最初に作られたかんがいも福島でした。地政学上関東に近いという特徴の中で、実験地としての意味合いが大きかったと思うんです。蓬萊団地も日本で初めての郊外型団地で、そういった社会実験が行われていたのが福島です。大規模店舗にしても一番に出店しやすい場所でした。そういったイノベーションが起こりやすかった場所で、ネーミングと考え方と意思決定の仕方なんだろうと思うんです。そこら辺の精度を高めてやっていくことをしなければならないと思います。

更に言うと、僕は予算に関しては、悲観主義者ではないのですが、10年後、20年後に教育予算がこのままの水準でありますかと言えば、本県の予算がこのまま平行でいくとは思っていませんし、むしろ1兆5千億の復興予算の中で動いている福島県で、教育予算をこのまま持ちこたえられるかどうかの話だと思っているので、その状況の中で何ができるかということの本気で考える必要があると危機意識を持っています。その上で何をするかといったときに、ビジョン・ミッションを作ることだと思っている、今の僕らの意識の中で、県教委との事業で会津地区の20校の高校に総合的な探究の授業をさせていただいています。その中ですごく感じることは、探究の授業をする上でも生徒たちが自己決定をしていない、自分たちはできないと生徒たちが言っている。先生たちを批判するつもりは全くありませんが、先生たちもあの子たちはできないんですよと言ってしまうんです。そこが多分乗り越えなければならない壁だと思っています、それは最近の言葉でいう自己肯定感と有能感だと思います。面白い論文が先月出ていまして、思春期で抱いていた価値観がどう幸福感につながるかという研究がなされていて、要は思春期に内的動機を強く持っていた人間、内的動機とは自己決定感を持っていたり自分はこんなところで役に立つと思っていた人間、更に自己コントロール力のある人間が最終的に幸せになる、と言われていています。その幸せになるというのが、10年後の社会において仕事を見つけている能力のベースになっているのではないかとと思うんです。内発的動機

	<p>と自己コントロールができるというのが、教育の目指す方向なのではないかと個人的には思っております。すみません、長くなりましたが以上です。</p>
<p>内田座長</p>	<p>ありがとうございます。次のところで議論しようと思っておりました「ふくしまならでは」の在り方にも話が及んでおります。行ったり来たりする中で意見が出てくることもあるかと思しますので、あまり枠にこだわらずに議論していきたいと思っております。今「ふくしまならでは」で、イノベーションが起こりやすい場だと分かりやすい事例が紹介されておりました。今の話と絡めてもいいですし、別の切り口でもいいのですが、他の委員さんから何かございますか。高瀬委員お願いします。</p>
<p>高瀬委員</p>	<p>スクールソーシャルワーカーの立場として、東日本大震災からの復興再生について福島県の現状を挙げていただいています。現在も震災の影響はまだあり、心のケアなど課題も挙げていただきました。コミュニティの崩壊や価値観の変化、家庭環境の変化という状況もあるのですが、これは昔には戻らないということで、心の復興再生を挙げていただいています。環境面・ハード面では整理されていきますが、ソフト面では戻らないという現状があります。この中で、新しい環境を受け入れていく、新しい価値観を尊重していくことが大事になってくると思うのですが、そのために必要なのは教員の多様性が大事だと思っております。育成したい人材ということで挙げていただいています。これは子どもたちだけではなくて、一人一人に柔軟に対応できる教員の人材育成も考えていかないといけないと思っております。検討事項の中にもあるのですが、多様なニーズに応えられる多様性のある教員体制を作っていくということも挙げていただいていますので、その体制を作るための施策を考えていければと思います。以上です。</p>
<p>内田座長</p>	<p>ありがとうございました。そのような趣旨を柱として入れるのも良いかもしれません。確かに育成したい人材というと児童生徒となりますが、先生方の多様性も育成していく上で重要な視点かと思えますし、先程の伴場委員のお話にあった内的な動機付けや自己コントロールができるなど、福島県の子どもたちが現状どうなのか先程事例的にありましたが、例えば、全国調査における福島県の位置づけなどのエビデンスもあれば、それと絡めて「ふくしまならでは」の教育を考えていけるのではないかと思います。</p>
<p>黒川委員</p>	<p>他の委員さんで、1番上の枠を中心に何かありませんでしょうか。黒川委員お願いします。</p> <p>育成したい人材にある、多様な個性を生かした、リーダー、プロフェッショナル等の多様な人材についてですが、先日あさか開成高校の生徒と話しておまして、本人たちの言葉ですが、自分たちはいわゆる進学校の人たちのように全ての教科でバランス良く学力があるわけではないが、デコボコはあるけれども自分たちの得意な教科や興味のある部分ではもっと深く学ぶ授業は受けてみたい、と言っていました。今の高校入試で入学する時に、バランスが良い生徒が集まっている学校と、デコボコがある生徒の集まる学校があり、生徒のその長所を伸ばす、個性を伸ばすという心持ちはあっても、生徒には少し物足りない場合もあるかもしれないと感じました。更に生徒は、あさか開成高校は単位制ですが、単位制は自分たちの好きなことを深く学べるのですごく良いので、他の学校も単位制にすれば良いのではないかと、そして他の学校に自分たちも勉強にいけるとよい、と言っていました。もしかするとイノベーションは、教育システムそのものに働き掛ける必要があって、戦後70年であまり変わっていないところに限界があって、良いところを伸ばすという点では少し大きな転換が必要なのかと思っております。また、勉強ができるという意味で</p>

	<p>は、オンラインでの授業は良いことだと思いますし、生徒もオンラインでいろいろな勉強をしてみたいですと言っていますが、全然話は変わって先程のお話に戻りますが、6万円でタブレットであれば、現在3、4万円で電子辞書を購入している者もいるので、タブレットの購入でこれが不要になれば、今後使いこなす人材を考えたとき、学校で与えられた物を使って、学校がケアするのではなく、そこも含めてやれるのであれば、個人的な意見ですが、他の購入するものを整理して、自己負担でタブレットを購入することを通して、様々な教育の可能性を広げることができるのではないかと思います。</p>
内田座長	<p>ありがとうございました。すごくいいお話だと思います。データで見て「ふくしまならでは」を考えると、国や県の調査では尺度が画一的な物になりがちですが、先程の伴場委員や黒川委員のお話や、青砥委員のお話もそうでしたが、要所所でイノベーション的なものや、子どもの現状としてすごく強みになっているもの、そして、様々なエピソードがあるかと思います。それらを分析しながら福島県ではこんなことが起きているという前提に立った上で、目指すべき姿を考えるということもあるかと思います。</p>
森委員	<p>他の委員からございますでしょうか。森委員どうぞ。</p> <p>様々な委員からの御意見を頂戴いたしまして、現場の人間として思うことなのですが、今年度小学校の学習指導要領が改訂になり、来年度が中学校、再来年度が高校と変わって行って、その中の3本の柱は、何を学ぶかというこれまでのものに加え、どのように学ぶか、主体的・対話的で深い学び、アクティブ・ラーニングを中心に据えています。果たして今の中学校・高校の教室で、100年前と同じ授業スタイルの学校はどの位あるのだろうか。アクティブ・ラーニングになっていない、100年前と同じ学校は結構あるのではないのでしょうか。黒板を背にした教員が一方的に知識を伝授するのは、進学校に行けば行くほど多いのではないか。そういった授業スタイルでは、おそらく正解のない課題に取り組む力や自分で課題を見つけて積極的に主体的に取り組むことは多分身に付かないと思います。授業の質自体を根本的に変えていくという仕組みにしていく必要があるのかと思います。日本全国の学校です。100年前と同じスタイルで授業をしているのは、ほとんど日本くらいと言われていまして、これが1つ大きな課題、もちろん福島県での課題だと思います。</p> <p>もう1つ気になっていたのは、世界経済における日本のプレゼンスの低下ですが、今後日本は企業も経済もどんどん周りの東南アジアの諸国に追い越されていくでしょう。先日麻生太郎さんの弟さんの麻生グループの会長である麻生泰さんの御講演を聴く機会がありまして、大変興味深いもので、今後日本は大変なことになる、そこで大事なものは教育である。国家100年の大計は教育なので、この教育を変えていかないと将来の日本はない、という非常に刺激的なお話を聴きました。確かに国際会議に出ても、日本人は英語も話せませんし、自己主張もできない人もたくさんいます。東南アジアの諸国から、上から目線で見られている、そういったお話を伺ったときに、これは大変だという危機感を持った訳であります。そういったことを頭に踏まえながら、目標設定をして取り組んでいかなければならないのかなと感じました。</p>
内田座長	<p>ありがとうございました。まさに御指摘のとおりだと思います。小野委員お願いします。</p>
小野委員	<p>1つ伺ってもよろしいでしょうか。少し分からないので、現場のことを教えてい</p>

ただきたいのですが、多様性に対応できる教員というのはそのとおりだと思っていて、学業だけでなくメンタルケア等を含めて大変な仕事が増えているということで、今の教室の人数は適正なのかずっと疑問に思っています、どうなのでしょう。福島県はかつて文科省とずいぶんやり合いましたが、あれは決して間違っていなかったのではないかと思っています、今だんだん理解が進みつつあるとは思いますが、ある程度の人数でないと子どもを見きれないのではないかとずっと引っかかっております。僕たちの高校時代は 48 人学級だったので、あれは森委員のおっしゃるとおり一方的な聞くだけの授業でしたが、小学校は田舎の方だったので 25、6 人でちょうど良かったのかなという記憶があります。福島県が本当に生徒のためを思う教育を進めようとする、どれ位がベストなのか現場の意見を聞いてみたいと思います。

渡部副座長

只見町の渡部です。1 クラスの人数については、私が新採用で福島市に採用された昭和 55 年は、福島県も標準法とおり 40 人学級でした。その頃は特別支援の考えもなく、知的障がいや発達障がいの子どものも同じ教室の中において、自然にインクルーシブができていたかと思えます。でも今から考えると、40 人は多いかと思えます。幸いに福島県は先進的に 30 人学級、少人数学級を行っており、小学校 1、2 年と中学校 1 年が 30 人、小学校 3 年以上と中学校 2 年以上が 33 人ですが、適度な人数でやらせていただいていると思えます。ただ、標準法とおりの教員配置なので、クラスが増えた分については講師の立場できてもらっています。只見高校は県立ですが、県立高校改革の中で 1 クラス 40 名定員となりました。県にお願いして 1 クラスあたりの人数が少なくなるよう要望しています。

内田座長

現場からの御意見がありました、小野委員よろしいですか。

小野委員

個人的には 30 人でも多いかという気がしていますが、そこは現場感覚があるのかと思えます。いろいろ勉強させてもらいます。

内田座長

次に、先程一部話題になりましたが、10 年間で目指す姿・「ふくしまならでは」の教育について、2 ページ中段のところを中心にしながら議論を深めてまいりたいと思います。御意見ございますでしょうか。齋藤委員はまだ発言されていなかったようですが、いかがでしょうか。

齋藤委員

大玉村からまいりました齋藤です。

冒頭で高瀬課長から、ICTが進んでいるのは小さな町村とのお話がありましたが、大玉村は人口 8,700 人位で、今年の 12 月頃までに小・中学校生全員にタブレットの配布を終えます。それだけだと不十分ですので、各教室に高速 LAN を現在工事中です。小さいことのスケールメリットを生かして進んだ教育を入れていこうという村長の方針の下、教育もやりやすく進めています。今話題となっているのは、御家庭の環境が問題となっていて、当然インターネットのない御自宅もあって、そういった人たちをどうするかという議論になったときに、デジタルの寺子屋みたいな形、例えば自宅で無線 LAN を使えない子どもたちが、インターネットを使った課題をするときに、無料で利用できる公民館などのオープンスペースを作って、環境を整備することで家庭間の差のない、教育機会の平等化を目指そうと、なるべく取りこぼしのないような村の中での教育を目指しています。

先程黒川委員から、自分たちはこんなことが得意なんだというお話がありましたが、そもそも企業の立場から言いますと、なぜ人は組織で働くかという、強みだけで仕事ができるように組織がしてくれるからなのですが、強い組織とは、基本的に人の欠点を無視して凡人を戦力化する、言い方は悪いのですが。長い歴史の中で

前年踏襲の組織、今までの組織ですと、「そつなく全てをこなすことが評価される」と「得意なことが評価される」の2点あると思いますが、企業の評価は2点あって、「問題を起こさないことが重要」という組織と、「とにかく成果を上げることが重要」といった組織になっています。大企業はかなりの多様な人材を抱えていますので、定型化した仕事もありますが、ほとんどの中小企業では毎年成果を上げないと生きていけない状況ですので、入ってきた人たちをいかに戦力化するか、いかに欠点を無視して得意なところを精鋭化していい方向に向かっていく形を作りながら組織を作ります。ここで1つ重要になってくるのは、福島県の傾向として算数・数学・英語が苦手とありますが、もう少し深読みをすると読解力のない子どもが多くて、自分の強みを自分の言葉で表現できない子どもとても多い。私も以前アメリカの小学校で授業を2単元担当したことがあるのですが、縦に並んでいるのではなく、グループ単位のアイランド型で人種ごとに分かれていて、黒人、白人、ヒスパニック、アジア、アフリカというように、同一の人が同じグループにならないようにして議論させる授業が小学校から徹底しています。こういった授業をしている人たちは、絶対議論には負けないんだということと、マイノリティであっても必ず最後まで話を聞くということを小学校から徹底していますので、こういった教育がないと、グローバルの中で勝ち抜いていく、文化の違う人たちを説得する人が育つ素地がないと思います。今後10年、ネットワークというところの中で、いかにコネクションを作っていけるか、それには自分をいかに訴えることができるのか、相手の意図をくみ取れるかが大事ですので、一方で国語力が重要だと思っています。

我々の中では統計学も重要で、ビックデータから傾向分析をしながら、例えばお店の商品の最適配置を決めたり、人の行動も傾向がないように見えますが、センサーを付けて分析すると運の良さやコネクション作りなど傾向が見えてきています。私たちは情報のハブになれる人間、自分のことをきちんと表現できる人が欲しいと思っていますので、今後育成した人材としてこういった人たちは是非涵養する方向に持って行くことが必要だと思っています。以上です。

ありがとうございます。先程の森委員のお話の学び方ですかね、今後非常に重要な視点で、学ぶ内容だけではなくて、学び方も重視していくよう学習指導要領が舵を切っていく中で、どんなやり方で読解力等を身に付けていくのかという視点で考えていくことが重要だと、改めて感じました。

他にございますでしょうか。伴場委員お願いします。

先程のトーンとは変わって、今の僕たちの経験から「ふくしまならでは」の教育ということで、こんなものが作られるのではないかという事例をお話しします。

震災という大きなことを経験し、震災後10年の振り返りをしているところですが、他県と比べて誇れることは、良いか悪いかは別として、ソーシャルのつながり、ソーシャルネットワークが確立されていること。更に言うと起業されている地域の若手リーダーだったり、地域に対して思いを持って活動されている方が他県に比べ圧倒的に多くなったはず。そこら辺の研究はきちんとしなければならぬと思っていますが、それがどういうことが起こるかという、今私たちは葵高校と喜多方高校で、総合的な探究の授業の地域コーディネーターの形でスタッフを配置しています。高校生たちに地域にどんな魅力的な仕事があるのか、地域の大人たちがどんな思いで地域で仕事をしているのか、モデルを作ることを目指していますが、20人程のリストがすぐに集まるんです。この分野で、例えばIT分野で先行的なことをしている会津の方、医療系で面白いことをしている方、地域の伝統を産業にして

内田座長

伴場委員

いる方、イノベーションを起こしている方、すぐに集まります。県の事業でやっていると、謝金は出せませんと言っても、これだけ来てくれるというのは、これは本当に強みなんだと思います。更に言うと学校側もハードルを低くしてくれているので、地域とのつながりが起こりやすくなっていて、例えば Eyes, JAPAN という、ITベンチャーで国内で有名な社長が悪ノリをして、高校生が何かやるならいくらでもやってやるという、高校生たちのアイデアを拾ってくれました。ここの仕組みがとても大事で、先生方が現状でいうとどこまで地域探究でやれるかと言うと、それぞれが教科のプロでも地域課題探究は別教科だと思うので、地域がそこをどう包括的にサポートしていく仕組みを作るかということ。それは震災由来でできてきた、大人のソーシャルネットワークを生かした上で、そこに高校生、中学生、小学生を入れ込むような仕組みができれば、今新しい教育の形としてやらせていただいている、そこに目星はかなりついてます。

内田座長

ありがとうございました。何人か手を挙げておられましたが、渡部副座長お願いします。

渡部副座長

これから 10 年先の福島ということで、只見町では少子高齢化が進んでいて、新入児童数が小学校 3 校では各校 1 桁から十数人です。保護者がこの先の教育に対して不安感があるのではないかと危惧しており、小中の保護者にアンケートを取りました。統合に関しては、「これからの状況で統合を考える必要がある」が 5 割で 1 番多く、次に「今は統合を考えるべきではない」が 3 割、他に「早急に統合すべき」「統合すべきではない」もありました。今後の在り方検討会の中で、今年生まれた子どもたちまでは先が読めるので、統合せず少人数教育の 1 人 1 人に目が届く良さを最大限生かし、デメリットを抑えながらこのまま 3 校を残す方向で考えています。地域の人材を生かしながら、地域との連携を深めた良さを生かした学びを行います。課題としては大人数の中で切磋琢磨するところですが、これは学校間の縦の繋がり、横の繋がりを取り入れることによって、実際に集まり交流する対面と、ICT 環境を活用してオンラインを通じた発表などで小規模校での課題解決に生かしていこうと思っています。

統合しないことは地域の願いでもありますが、地域コミュニティの核としての学校として考えたときに、地域の衰退につながるおそれを住民の方が考えているので、少人数教育を生かしながら課題解決活動、コミュニケーション能力、考える力、協働する力の育成には、教員の指導力に係る部分となりますが、これは地域だけではなく全県的な課題であると思います。2020 年 8 月に出版された国会図書館の結果によると、全国の小学校の 4 割、中学校の 5 割が小規模と算定されており、これからも 10 年間で増えていくのだと思います。

内田座長
青砥委員

ありがとうございました。青砥委員お願いします。

10 年間で目指す姿・「ふくしまならでは」の教育について、客観的なデータから入りたいのですが、少し古いのですが 2015 年に県内から県内へ進学した生徒は 13.3%、県内から首都圏に進学した生徒は 44.8%で、東北 6 県の中でも最も多く首都圏へ流出しています。良いか悪いかは別にして、福島県に人が集まる魅力的な教育と書いてあるので、今現在どのように流出しているか議論の前提にすべきと思いデータを紹介します。

どんな高校生たちが首都圏に出してしまうかと言うと、普通科進学校の生徒が多いと思います。直接高校生に接していますので、これからお話するような考えに至った 2 名の高校生の例を紹介させていただきます。1 人目は、先週磐城高校で 2 年生

の総合的な探究の生徒発表会がありました。半年間探究的な活動を行い、生徒が1人1つテーマを持って地域の課題、身の回りの社会の課題を何か解決に導くような課題解決学習の発表会でした。その中でイトウさんという2年生の、磐城高校のバリアフリーに関する調査・探究がありました。分かったことは、何も進んでいないということです。車椅子が磐城高校にあるので、それに乗って実際に歩いてみたら段差など困っていることが分かるだろうと思ったのですが、車椅子を借りようと思ったらパンクしていて、空気も入っていなかった。磐城高校のシステムそのものが、障がい者は来なくていいというメッセージになってしまっていることを、イトウさんが見つけてくれたということです。磐城高校に障がい者がいないということではなく、あらかじめ障がい者を選んでいないことを象徴しているのではないかと思います。

別の話をします。白河高校出身の東京大学のトミイさんは、浪人して入学し現在2年生です。それまでは高校で一番勉強ができたんですが、全国から集まった学生たちと出会って、自分しかできないことが何もないのではないかとというコンプレックスを持って大学1年を過ごしました。その時に思ったのは、自分は福島出身であるということ、首都圏・関西圏からは多くの東大入学生がいるが、福島県からは少ないので、福島出身ということがキャラクターが立つということ。自分が思う「ふくしまらしさ」が何かといえば、小中学校の友人が地元で働いていることで、首都圏・関西圏の私立中高一貫校からの入学者には、そのような友人はいない。自分には地元の飲食店で働いている同級生や、地元で起業した、20歳で起業するのは向こう見ずですが、友人がいると教えてくれました。「ふくしまならでは」の教育が何かのメッセージを出す役割は、福島らしさについてこの会議が議論を積み重ね、精緻なデータなどを背景に議論をして、何かメッセージを出すとすれば、磐城高校のイトウさんと白河高校出身のトミイさんの話がヒントになるのではないかと思います。

メッセージという話から繋げたいのですが、高校入試と教員採用試験について話題を提供したいと思います。高校入試の全日制の定員が560名下がりまして今週拝見しました。先週には採用試験の結果も同じく報道されて、全日制の高校の定員が下がりました、採用試験の小学校・中学校の倍率が微減しましたというニュースでした。これまでは、倍率が高いので勉強を頑張りましょうというメッセージを公立高校は出してきたのかなとか、採用試験でもこれだけ難しい試験だから学生時代勉強を頑張ってくださいというメッセージを出してきたのかと思いますが、既に倍率が低下する、定員が減少する福島県の状況の中で、県教育委員会から又は高校、中学校から、子どもたちやこれから教員になる人たちに何かメッセージがあるかという、ないのではないかと今思っています。なので、ここで議論しようとしていることはとても重要で、子どもたちがどんな学びをしていくのか、どんな人に福島で働いて欲しいと思っているのか、採用時のメッセージ、あるいは高校に入る時のメッセージになるのではないかと思います。そこで打ち出したいのは、序列化・階層化・分断のメッセージではなく、例えばトミイさんは白河高校は県南で進学実績の一番の高校ですが、その序列をくぐり抜けて東大に入った努力した学生さんだと思いますが、東京に行けば序列が真ん中になってしまい、序列のトップであることを自分のアイデンティティとしていたことが崩壊してしまう、福島で生まれたからこそそのアイデンティティは何かというと、多軸・複線・多様性や対話と協働のキーワードから考えていけるのではないかと思います。さらに福島は3つの大

きな地域がありまして、中通りが一番偉いのではなく、会津が一 番優れているのではなく、浜通りだけが未来をやっているのではない、それぞれの個性を生かしながら、この県に生活する人が豊かな未来に向かっていこうというのが福島だと思います。多軸や多様、違いを認め合って対話して協働する、はま・なか・あいつが協働するメッセージが出せるのではないかと考えています。それがこれから地元に残る子にとっても、地元を離れる子にとっても重要ではないかと考えています。

私は白河から来ているので、松平定信の句を紹介したいのですが、「山水の高き低きもへだてなく 共に楽しく円居すらしも」と南湖公園に掲げられている句碑がありますが、地元の文化財課の方が整備して守ってくださってございまして、今年福島大学の先生がこれを題材に福島ビエンナーレを白河市街地で展開していただいています。松平定信さんは、江戸時代に武士と町民・農民を分けて交流するのではなく、市民全てが集まる公園として南湖公園を整備し、このようなアイデンティティが根付いているのが福島だということであれば、もう少しこの部分を、ここにいらっしやる皆様の経験を議論していけると考えています。以上です。

内田座長

ありがとうございました。実践に基づく、多軸・複線・多様性というキーワードが出ましたが、こういう事例を基に考えていくことの重要性を改めて実感しました。最初の会議で伴場委員から、「ふくしまならでは」「山形ならでは」は抽象的になりがちで、福島を山形に置き換えてもどちらかわからないでは、せっかくの計画を作る意味がないとのご指摘がありました。1つ1つ皆さんが実践されているエピソードを基にしながら、抽象化していくプロセスが必要なのではないかと実感しました。青砥委員のお話に触発されましたが、浜通りにいきますと約6割～7割の高卒者が首都圏に流出している現状があります。その後都市部の生活に慣れてしまうと、なかなか戻ってこない実態もあります。浜通りに国際教育研究拠点が設立されることになり、そこを拠点にエネルギー、廃炉、農業など色々な研究や産業が生み出されるということで、復興庁が投資をしようとしています。そういうところと連携しながら、小中学校段階に分かりやすいプログラムを作って関心を持ってもらうことをやっていけば、わざわざ東京に行かなくても地元にいながら世界最先端のことが学べるんだという流れを作っていくこともできると思います。首都圏にそれだけの人数が向かっている現状がありますので、それらを踏まえ教育の現場でも人口減少にどう対応していくのかということも考えるべきかと思いました。

他の委員からいかがですか。小野委員どうぞ。

小野委員

齋藤委員から読解力のお話が出ましたので、職業柄あちこちでお話しているのですが、最近の児童生徒さんの作文力は本当に低いんです。自分もこうだったかなとびっくりします。時期的にこの季節は様々なコンクールの作文、感想文を200本程読みますが、傾向として自分の言いたいことをまとめられない子が多いです。しっかりとまとめて書ける子は、段落立てをして論理的に書いている。そうでない大多数の子は、まず日本語がなっていない、接続詞ができていない、なので等をそのまま使ってしまう、段落切れも全くなくて800字、1600字を1段落で書いてくる、句読点もきちんと付けられない、これは高校生の話です。進学校の子たちは比較的指導がしっかりしているので読める文章ですが、すぐに社会に出て行く子たちの方がかなり低いです。多分ちょっとした先生の指導が入るか入らないかで全く違うとされていて、特定の名前を出す訳ではないんですが、森委員の学校は1年生が出してきてもしっかりした文章で出てきます。かなり厳選して出してこられてると思いますが、そうではないところは、とりあえず書いて出す、出すことにも意味はあり

ますが荒削りにもならないものが出てきます。

もう1つの傾向は、論理立てができていなくて、1つの事象に散発的に思ったことをただ単に羅列して書いてくる、4つ、5つの意見をそのまま書いてくる。締めくくりはだから何々を大切にしようと思った、とどこにでも共通しているパターンです。これは先生方と話をしたのですが、一朝一夕でできるものではないので、小学校からしっかりと積み重ねてきた中で、文章力、読解力が作られてくるんだと思うんです。では先生が悪いのかというと、専門でない先生かもしれないですし、そこをどうしていくかが課題だと思うんですが、校長先生等は忙しくてなかなか指導しきれず、コンクールなどそのまま出してしまうことが多いですとおっしゃるのですが、せっかくやっていることが授業にどう反映されているか分からないのはもったいないです。今の状況で何ができるかという、その学校内で完結しなくとも良いのではないかと考えています。ネットが使えるのであれば、別の手の空いている先生などネットの中で指導を仰いだり手立てはあるのではないかと思います。それと併せて、インターネット環境がこれだけ良くなってきている中で、「ふくしまならでは」「ふくしまらしさ」を出そうという時に、先程来ずっとでているのは多様性、はま・なか・あいづにしても、浜通りに国際教育研究拠点ができる特徴立てにしても、浜通りに限らなくてもいいのではないかと考えるんです。例えば、浜通りの子はすぐに対応できるでしょうし、と言ってもすぐに双葉に移住してくる訳ではないと思うので、中通りや会津の子もネットを使って興味のある授業を受けられるようにするべきだと思います。逆に、会津の自然などはネットでは無理なので、アナログなところは直接行って指導を仰ぐなど、福島のいろいろな素材を使う環境を作っていくのが、「ふくしまならでは」の教育につながっていくのかと、委員の方々のお話を伺っていて思いました。

内田座長

ありがとうございました。最後に、1番下の（今後の検討事項）今後考えていくべき教育施策ということで、これは次回以降中心に議論していく内容ですが、今日10分程度皆様から御意見があればですが、具体的な施策に落とし込んでいくアイデアなどいただくと良いのですが、いかがでしょうか。丹野委員お願いします。

丹野委員

素朴な疑問なんです、10年間で目指す姿について、10年後の世の中はどうなっているのでしょうか。私たちは、もっと具体的にイメージする必要があるのではないかと思います。タブレット1人1台の時代になっているとか、もしかすると現在のようなシステムの学校がないかもしれないとか、そういう未来を考えたときに、小野委員や伴場委員のお話を聞いていると、学校の存在意義が変わってくるのではないかという気がするんです。YouTubeを見ていても、再生回数の多い動画では、非常に分かりやすく説明されていて、失礼ながら学校の先生のお話よりも分かりやすいというものも多い。そうすると、1人1人にタブレットが配布されたら、子どもたちは学校に行かずにそういったものを自由に選択して、自分の得意なものをどんどん勉強する、苦手なものはやさしいところから学ぶというように変わっていくだろうと。あるいは、今コロナ禍で修学旅行が変わってきていると報道されていますが、奈良のお坊さんのお話を奈良に行かずに聞くことが可能であれば、県立博物館や国立博物館の学芸員の話も聞くことも可能になる訳です。果たしてそうなったときに、学校の役割はどうなるのか。例えば、担任の先生の役割は、その子その子の個性に応じて、こんなプログラムがあると勧める等、コーディネートしていく役割がものすごく大きくなっていくのではないかと。極端な話、教師は教科を教えるのではなく、生徒の個性を見極め尊重するスキルを向上させていかなければならなく

なっていくのではないかと思います。

10年間でテクノロジーがどこまで進むのか、誰にも予想できるものではないのですが、ある程度は私たちも、この辺りまではこうなっているだろうということを前提にしておかないと、10年後の福島は見えないのではないかと思います。以上です。

内田座長
森委員

森委員お願いします。

丹野委員のお話を伺っていて、そういった考え方が如実に表れたのがコロナ禍でのオンライン授業であったと思います。オンライン授業で学校が成立するのであれば、ハコモノの学校は不要になるのではないかと。そこで人気を上げているのがN高、前回もお話したと思うのですが、ものすごく志願者を増やしています。これは我々全日制高校に対して大きなライバルになると思うのですが、ただ学校は自分のいいところだけを学んでいけばいい場所ではなく、部活動やホームルーム、友人との関係の中で社会性を身に付ける場だと思っていて、これはオンラインではなかなかできないことだと思うんです。ここで検討することはもちろん、ハコモノの学校が続くといくことを前提とした議論と考えてよろしいですね。

先ほど小野委員と齋藤委員から出てきました読解力、読解力の低さは顕著であると思います。お話を伺っていて新井紀子先生の「AI vs. 教科書が読めない子どもたち」を思い出しましたが、AIの苦手な読解力で勝てなくて何で勝つのかと思うのですが、読解力もさることながら私は英語力ですね。資料にあったかと思うのですが、算数・数学・英語が苦手、これが弱みかと思うんです。ただ、これからの10年後の教育を目指す上で、強みを更に生かすことも大切だと思いますが、むしろ弱みを強みに変えることも大事かと思っていて、読解力もさることながら英語力、年に1度新聞報道されますが、中学校3年生の英検3級取得者数が低く、高校3年生の準2級取得者もワースト2番位で、余りにひどい。ところがそれを教える教員の英検準1級の取得率も、ワースト2位だったのではないのでしょうか。ここは真摯に受け止めて、これを上げていかないといけないのかなと、子どもたちの英語力を上げていくのは非常に難しいのではないかと思います。もう一つそのこと10年後福島県の高校3年生は全員英検2級をとらせるという目標を掲げて、中学3年生は英検準2級など、全国大会を目指すから東北大会や県大会で優勝できる、県大会優勝を目指した子どもは全国大会では優勝できないと思うので、目標は高く持たせた方がよいのではないかと思います。以上です。

内田座長

ありがとうございました。

今のお話の冒頭にもICTについてあったかと思いますが、AI等にどう対応していくかということもありますが、逆に人間ならではのことといいますが、ICTで養えない社会性や読解力、英語力の育成などを計画に書き込んで、できれば高めの目標で目指していくのだという柱も必要という意見だったと思います。

他にございますでしょうか。佐藤委員お願いします。

佐藤委員

皆さんのお話を伺っていて、私も何かお話ししないと帰れないと思い、今回は1回目となりますので感想みたいなものになってしまうのですが、今取り組んでいる県総合教育計画は切り口というか、方向性というか、ICTを整備する予算や教員の資質など、とにかくあらゆるものを引っくるめた壮大なものなのだと感じました。

10年間で目指す姿についてですが、この10年もかなり変わってきていて、今後10年もどう変わるかわからず、そこがはっきりしないと計画も立てられないのではないかと御意見がありましたが、世の中が変わっても変えてはいけないもの、不変

的なものも計画の中で訴え続ける、示し続ける必要があるのではないかと思います。戦後 70 年以上経つのですが、最近アクティブ・ラーニングと言われますが、対面学習は変わらないです。なかなか変わらないので、この計画は学習指導要領まで踏み込んでいくのかなと考えたりもしたのですが、子どもたちに対して、目の前の子どもたちがどう大人になっていって欲しいか、どんな子どもたちでいて欲しいか、が基本にあると思ったんです。学力向上もちろんですが、ICTを活用したり知識を身に付け自己実現する子どもも育てたいですし、でも高校卒業後首都圏へ出てしまう子どもも 40%程いることを聞きますと、やっぱり戻ってきて欲しいと思います。グローバルに羽ばたいて欲しい反面、地元をなんとかしたいと思ってふるさとに戻ってきて欲しい、一旦外に出ても戻ってきて欲しいという思いもあります。私も会津から来ていますが、町の学校が統合し過疎化が進み、集落が維持できないのではないかという危機を感じる中で、グローバルに羽ばたいて欲しい反面、ふるさとに戻ってきてふるさとのために働いて欲しい、活動して欲しいという思いもありますので、それは子どもたちの選択だと思うのですが、福島全体でも人口減少がありますから、自分たちの力でふるさとをなんとかしたいと思う子どもが増えて欲しいので、ふるさと教育、郷土を知って郷土愛を持つといった部分も必要だと思います。これは、10 年後、何十年後も変わらないことかと思います。その中で、歴史を知識だけで学ぶのではなく、地域の人と触れ合うこと、子ども時代に地域の大人にどれだけ関わって可愛がってもらったか、交流したかの記憶や経験で、地元に戻る意識が変わるとの話も聞きます。

私は県の社会教育委員もしておりましたが、小中学校では学校で地域の人と一緒に活動してもらうことができるが、高校ではできないというお話を聞いていました。先程葵高校の事例等をお伺いして、高校でも地域の人を呼び込んで、教員だけでは教えられること、具体的な将来の職業についてなど幅広く学べる訳ですから、地域の人の力を借りて連携することは、今後福島に思いを寄せる子どもたちをなるべく多く育てるために、地域の大人とたくさん触れ合って、それが自分の将来の目標につながれば 1 番良いことだと思います。子どもたちの夢を叶える、自己実現が根底にあります。ふるさとを持続させたいという部分でも、人材づくりと同時に実現できるような施策等は、10 年、20 年後も変わらないのではないかと思います。

資料やいろいろな場面で自己肯定感がでていますが、私は家庭教育インストラクターという肩書きで、就学時健診での保護者向け子育て講座で、子どもたちが自己肯定感を持つことは、子どもたちが何をやるにしても、勉強を頑張る、スポーツを頑張る、夢を持つ等の 1 番の根底にあるのが自己肯定感だと話しています。自己肯定感とは子どもたちが作り出すのではなく、大人によって与えられるもので、褒められて良いところを伸ばしてもらったり、そんな自己肯定感をたくさん味わえるよう学校の中で、先生との関わり、さらに地域の人が入ることによって、地域の方は親や先生よりも褒めてくれるので、子どもたちに自己肯定感が身に付けば、前向きに自分を高めようという子どもが増えると思います、具体的ではないのですが。自己肯定感が育成されるような取組も是非盛り込んでいただきたいと思ひますし、具体的な内容について皆さんのお力で分かるの良いなと思ひました

ありがとうございました。どういう大人になって欲しいか、ふるさと教育、自己肯定感など重要な視点だと思いますので、今後盛り込んでいければと思います。

では時間となりましたので、本日の議論はこの辺りで終わりたいと思ひます。

それでは、本日いただいた貴重な御意見を基に、事務局で目指すべき教育の姿に

内田座長

ついて修正していただき、次回の懇談会ではそれを改めて確認させていただき、今後具体的な目標や施策について検討してまいりたいと思いますが、その方向でよろしいでしょうか。

(異議なし)

では、その形で進めてまいりますので、事務局よろしく申し上げます。

もう時間ですので、本日の議論は終了させていただきますが、事務局から報告、事務連絡がありますので、高瀬課長お願いします。

事務局より2点ございます。

まず、1点目ですが、資料4を御覧ください。

今回福島県総合教育計画策定に当たり、高校生からの意見を取り入れていきたいと思い、高校生ワークショップの開催を予定しております。

1(1)の提案募集を御覧いただければと思いますが、10月15日までを締切といたしまして、「ふくしまの教育に関する提案書」を高校生から提出いただいています。その中から優秀な提案を選びまして、高校生10名程度で(2)に記載のオンラインによる意見交換会を開催したいと考えております。オンラインによる意見交換会の様子につきましては、YouTubeにて後日配信させていただきたいと思っておりますので、是非皆様方にも御参観していただければと思います。

なお、(2)ウに記載のとおり、当日のファシリテーターとして青砥委員にお願いしているとともに、2(2)に記載のとおり提案いただいた提案書の審査については、普段高校生の探究活動等に携わっていただいています青砥委員、黒川委員、伴場委員のお三方に審査員をお願いしておりますので、御了承をお願いいたします

2点目は、今後の予定についてですが、今回の開催は年内を目途に調整いたしておりますので、後日改めて御連絡させていただきます。

また、本日十分御発言いただけなかった内容や、後日お気付きになられる内容があれば、10月末日までにメール等で御質問や御意見をいただければと思います。

議事録につきましても、作成後、御確認をお願いいたしますので、よろしく願いいたします。以上でございます。

それでは、以上をもちまして、本日の協議は終了いたしました。

審議に御協力いただきまして誠にありがとうございました。

－閉 会－

以上をもちまして、第3回第7次福島県総合教育計画策定に関する懇談会を終了いたします。本日もまことにありがとうございました。

教育総務課長

内田座長

事務局